

『三四郎』—西洋化社会の中の「迷羊」

台湾大学大学院生 呉 勤文

『三四郎』は従来青春小説や文明批評小説とされてきた。白面の青年小川三四郎が新女性たる里見美禰子に翻弄されることがテキスト展開の主軸となっている。西洋化の都市という社会背景の中で、近代文明を享受し体現する彼らの関係の生成や変化は、作者によって「人間が勝手に泳ぐものとして仕上げられたが、文明摂取に関して人物の関係性における衝突と認識の相違も覗える。その関係性の衝突はすなわち、新女性たる美禰子が愛する野々宮宗八や自分を愛する三四郎よりも、「立派な」人を結婚相手に選んだことが一つの例である。そして認識の相違は、「露悪家」に関する捉え方や「迷羊」をめぐる美禰子の意味と三四郎の解釈の違いなどの側面に浮上する。

小論は、三四郎と美禰子の男女関係の様相を中心に、西洋文化や思想を享受するそれぞれの人物の言動から、その認識の相違を検証することによって、関係性の衝突の原因を求める。その手がかりとして、作品における視点の問題から着手し、「迷羊」をめぐる視点の問題を提示し、さらに三四郎の認識の問題、「露悪家」たる美禰子の直面する現実問題、それから三四郎及び美禰子の西洋化社会における立脚の問題を論ずることによって、明治の近代化していく過程における、その西洋との共生の限界を提示してみる。